

第2章 現代中国女性の恋愛観と結婚観 —杭州における大学院生のインタビューから

府中 明子

FUCHU Akiko

1 はじめに——背景と目的

現代中国の社会の変化と発展は著しく、人びとがくらす上での制度や経済システム、インフラストラクチャーも変化を続けている。世界的な位置づけを見れば、2009年に貿易額で世界第一位となり、2010年にGDPは日本を抜き、アメリカに次いで世界第二位の経済大国となった。中国は日本にとって重要な貿易相手国であり、2016年時点では輸出先国としてアメリカと僅差で2位、輸入先国として2位のアメリカの約7兆円大きく引き離して約17兆円で第1位の取引先である。歴史的にもつながりが深く、文字から宗教、飲食物や紙、さまざまな技術においても中国からの影響で日本文化は発展してきている。近年では人びとの行き来も盛んになり、過去から現在に至るまで、中国は日本の重要な隣人であり続けている。しかし、日本に住む日本人にとって、中国の人びとがどのように人生を展望し生活しているのかについて、あまりピンとこないというのが本当のところではないだろうか。現代中国社会はあらゆる側面での変化が著しく、家族に関する制度だけでも、2015年に30年近く続いた一人っ子政策が廃止となり、晩婚晩産で一人っ子を育てるという人びとの、特に女性の結婚や出産に関わる人生展望は大きな変化があった。このような社会の変化の中で、結婚を検討する年齢の若い女性たちがどのように社会をとらえ、生きようとしているのかについて、知る機会はいらない。中国の家族や女性に関するこれまでの研究では、統計資料が十分に整理・検討され、全体像が掴みやすくなってきている。また、ジェンダー分析の領域において、女性のインタビューをもとに女性のおかれた現状と問題について指摘され、政策提言に至る研究なども存在する。中国で女性学やジェンダー分析はすでに研究の一大領域となっており、そこには十分な研究の蓄積がすでにある。ただし、一人一人の女性たちがどのように学校に通い、就職し、恋愛や結婚についてどのような思いを抱え、どのように意思決定して過ごしているのかについて、つまりそのくらし向きについて知る機会というのは、研究の領域以外においてもほとんどない。欧米社会については映画やドラマなどを通して日々の生活のおおよその雰囲気に触れることもできるが、現代中国の生活の雰囲気を知る機会が日本ではほとんどないのである。そもそも人口が日本の約10倍、国土が約40倍である中国を一様にとらえることは不可能であり、大きく分ければ農村と都市部とは全く違う社会生活が営まれている。それについてはインタビュー中でも「農村では…」「私のふるさと（農村地域）では…」と語られるなど、現代中国の若い女性自身も前提として共有している事柄である。また、文化圏の違いとして、北と南で

の違いも女性たちは明確に認識している。南北での価値観の違いは、性別役割規範の価値観となってあらわれる。この分野では、女子労働に対して許容的かどうかについて検討した瀬地山による研究がある（瀬地山 1996）。また、空間の違いだけではなく、他の社会同様時間軸での違いもある。戦後、中国は制度変革が相次ぎ、世代によって得た経験も大きな差がある状況である。本稿で分析したインタビュー調査においても、調査協力者の両親が学校に通った経験がないという大学院生もいた。近年の日本においては、世代をまたいで階層が固定されているような状況があり、高学歴者の親は高学歴であることが暗黙の前提として人びとに共有されているといえる。また学校に関する制度にほとんど変化がないため、「学校に通った経験がない両親を持つ大学院生が珍しくない」という状況を日本では想像しにくいだろう。

本研究で取り上げるのはごく一部の事例であり、中国社会全体をあらわすものではない。しかしその事例から浮き上がってくる現実を一つ一つ丁寧に見ていくことで、新たな知見に繋げることが本稿の目的である。

2 先行研究

2.1 中国社会の概要——歴史的、制度上の変遷

現在の中国、すなわち中華人民共和国の建国は 1949 年である。戦中からの人民解放軍の戦いがあり、中国共産党の存在感が圧倒的なものとなり、社会主義政権が誕生した。まず、1949～1978 年が一つの時代の区切りであると認識されている。中華人民共和国の誕生後、憲法と法令にはすべて男女平等が明文化された（譚 1994;前山 1998,p66,l6）。特に婚姻法や労働保護条令では、女性の利益が考慮され、保護規定が設けられた。中国共産党の組織系統には各レベルの婦人連合会が組み込まれ、女性の利益を守る役割をもつこととなった。男女平等を主導的なイデオロギーの一部とし、啓蒙宣伝の一部とした。現在でも、啓蒙宣伝については街の各所で見られ、地下鉄の広告、観光地の店舗の電光掲示板、飲食店の中のポスターなど、啓蒙中心のものから商売の広告に織り込まれたものまで、さまざまなレベルで見ることができる。啓蒙の内容は男女平等だけではない。中国人民としてあるべき態度全般、つまり道徳的な姿の一環として、勤勉や博愛の精神とともに織り込まれている。例を挙げれば、筆者がフィールドワークとして 2017 年 6 月に南京市を訪問した際に、とある小売店の入り口に設置された大きな電光掲示板には、「公正 放置 愛国 敬業 誠信 友善 富強 民主 文明 和諧 自由 平等」と流れ続けていた。このような店は珍しくなく、人通りの多い場所や観光地では当たり前の風景として存在している。現在でもこのような啓蒙は見られるものの、当時の画一的な「男女同等」は、実際には多様な選択の可能性を排除し、のちに伝統的な性別への「復帰」に向かう表象がそこに隠されていた（譚 1994;前山 1998,p67,l1-3）。また、男女間賃金老格差については、政府が 1954 年に公布した同一労働同一賃金原則に基づき 1956 年に国有単位で職務等級賃金制度を実施したため、

その差は小さかった（馬 2011）。

大躍進から文化大革命に至り、社会主義化への方向性はより強く出されていく。大躍進は1957年ころより開始されており、1958年の第八回共産党大会第二回会議では重工業への優先投資を実現するため、農業での集団化と労働動員が強化された（瀬地山1996,p301-302）。1960年代には劉少奇、鄧小平らの手で集団化の程度を下げ、工業でも経済的な刺激を重視するなどの調整政策が採られるようになった（瀬地山1996,p303）。

1965年ころから毛沢東による劉・鄧両氏への攻撃が強められ、文化大革命が発動された。毛沢東による会議中の発言とされる「女は肩に点の半分を担っている。女は天の半分を勝ち取らねばならない。」は、前後の文脈なども定かではないとされながらも強いメッセージとして中国社会に広まり、「男にできることは女にもできる」という女性観が主流となった（瀬地山1996,p303）。瀬地山は、男女の区別のつかない人民服がその象徴であると韓国や朝鮮民主主義人民共和国との対比から述べ、男女の差を否定する方向に圧力がかけられていたとも述べている（瀬地山1996,p306）。儒教的な男女の区別に関する規範や封建的道德は徹底的に批判の対象であり、また知識分子は毛沢東の攻撃の対象となっていた。文革のこの時期は、女性を伝統的な家父長制の支配する家族関係から引き離そうとするベクトルが強く働き、女性を外に出すという方向が政策的に打ち出された点が特徴的であったと瀬地山は分析した（瀬地山1996,p306）。

その後の1979～1991年、ここで中国社会は大きな変化を経験する。1978の第五期全国人民代表大会で「四つの現代化」という新しい政治・経済目標が提示された。引き続き同年に労働者、農民の自主的な経済活動を重視する開放政策が採択され、計画経済体制から市場経済体制へと大きく方向を変えることとなった。特に集団化と、女性の労働力化に変化が生じた。譚はこれについて、「社会の階級分化、地域分化、組織分化などの過程で、性別分化も出現した」（譚1994;前山1998,p67,16-7）とみている。1980年代には女性問題がひっきりなしに提起され、ジェンダーをめぐっての論争が繰り広げられた。1980年代前半の「二保一」と呼ばれる論争では、女性が仕事を辞めて家事をするべきだという議論が起こった。家事の社会化が進まなかった当時の中国では、共働きの家庭は疲弊していたためと言われている。1980年代後半には、「婦女回帰」論争が起こった。文革期の女性の働かせ方に粗野な面があり、政治目標のみを強調した「左傾」の誤りであるという論理が出てくることとなった。この論争は1989年の天安門事件を契機に立ち消えとなったため、当局が明確な意思表示をせずに女性労働は経済の趨勢に任せるというかたちになってしまった。この矛盾は現代中国社会において前提となる重要な価値観の一つである。

1990年代以降、市場経済体制になった中国は著しい発展を遂げるが、同時に採用、職務配置、昇進及び賃金などにおける男女間の格差が生じ、社会問題となった（馬2011,p ii）。1995年以降、国有企業の改革に伴い、余剰人員の整理が女性中心に行われた。「下岗」と呼ばれる女性を対象としたレイオフが行われ、都市部の女性労働者は減少した。婦女回帰は

1980年代から1994年、2001年、2011年と複数回立ち起こってきており、2010年代は都市部の中間階層で専業主婦^①が生まれつつあり、その現実に即している論争であるとみることもできる。ただし中国ではそれに反対する勢力も存在し、就業率のグラフがM字型を描くことはまずないだろうとみられている（瀬地山 2017）。

2015年には、1979年以来続けられてきた「一人っ子政策」^②が廃止され、2016年は夫婦が二人まで子どもを持つことができる「二人っ子政策」となった。引き続き産児制限は維持されているものの、人びとの人生設計に関わる大きな変化があったといえるだろう。

2.2 中国女性の将来展望に関わる価値観

中国では、女性の就労率は高く、就業状況を表すグラフにおいて日本や韓国で起こるような子育て世代の就労率が低くなる「M字型曲線」を描くことがない。ただし、女性保護の観点から女性の定年がかつては40歳代であったことなどから、50歳代以上の年齢における就労率は日本女性よりも低くなる。中国女性の就労率は、15歳～49歳までは日本女性と比較して高い水準だが、50歳代になると途端にグラフの線は下降し、日本女性の就労率とグラフの線が交差する（瀬地山 2017）。現在、制度上高齢者も働くことができるが、中華文化圏において高齢者が就業することは否定的である価値観のためだとみられている。子どもが結婚した後は孫の面倒を看ることが慣習であり、良いこととされている（「含飴弄孫」、孫の面倒を看ながらのんびりと老後を過ごす様を表す言葉）。この価値観は現在不動のものであるとみなされている反面、現在の若者は結婚後に子どもができると、自分もしくは配偶者の親が家事・育児の面倒を看てくれるため、家事・育児のスキルを磨くタイミングがなく、将来自分たちの子どもが成人した後に同じように子ども夫婦やその子どもの面倒を看ることができない、したくないといった声も北京市における2017年のインタビューで筆者は聞いている。今の若者世代まで、あるいは今の若者世代だからこそ享受している親の家事・育児の助けは、今後継続する慣習あるいは価値観となりうるかどうかは不明であるし、現在この価値観を当然と見なす若者から、自分たちは（絶対に）やりたくないし、スキルがないからできないという発言を聞くことになったのは非常に興味深かった。

結婚については、晩婚化が社会問題としてクローズアップされている反面、晩婚化はそもそも中国共産党が主導して進めてきた政策であったこと（婚姻可能年齢は世界で一番高い）、婚姻可能年齢は女性20歳、推奨年齢は22歳以上とされながらも、農村では中学校や高校の学卒後に10代で「結婚」する人も珍しくなく、むしろそれが標準的ですらあるとの発言が2017年の南京市でのインタビューで得られた^③。中国では親同士に紹介を済ませれば、結婚しておらずとも結婚を前提に男女が同居をすることは当たり前であるため、法律婚をせずに10代のうちに「嫁に行く」ことは可能である。早婚の実例を知っているというインタビューは得られても、晩婚の実例として未婚で30歳前後の、都市部に住んで働く中国女性を探すことは大変困難であり、なかなか出会うことができない。他国でインタビュ

一を行うという制約があるため、筆者の人脈上のバイアスによってそのような人に出会うことができない可能性も否定できないが、結婚していない 30 歳前後の女性についてインターネット上でよく話題になっているという割には、「自分の周囲にはいない」と皆が口を揃えて言うのには矛盾を覚える。言説レベルと実際とが食い違っている可能性もあるので、この点については婚姻率なども含め十分に検討すべきである。

それから、1990 年代の「婦女回帰」と前後して、人々の意識が「回潮」しているとみる向きもある（青柳 2013,p222）。回潮とは、一度廃れた伝統的な価値観が復活することを意味する。瀬地山は中国の社会主義について「土着化 indigenization」という概念を用いて説明している（瀬地山 2017）。土着化とは、ここでは「社会主義化の時期のあとに、文化規範がにじみ出る現象のこと」（同 p5,114-15）を意味している。いずれにせよ、中国の伝統的な価値観は社会主義政策後も世代を超えて立ち現れてきており、これは政治体制や経済政策に関わらずみえてくるジェンダーを考察する上で重要な意識や価値観であるといえるだろう。

2.3 問題意識

ここまで歴史的・制度的背景を追い、現代中国における意識や価値観についてもみてきた。このような社会に生きる人びとが、実際に何をどのように考慮しながら生活し、くらしているのかについて、まだみえてくるとは言えない。人びとの暮らし向きがみえてこないところに、その社会への理解ができていないとは考え難い。歴史や制度について確認しても、現在の意識や価値観を共有していてもなお、それぞれのくらしや生き方が存在するのが人間社会であると考ええる。私たちがどのように考えても、提言しても、人びとのくらしに届かなければ、それに意味があると実感することは難しいのではないだろうか。そこで、本稿ではインタビューを通して女性たちの語りから、現代中国社会の一端をみていくつもりである。本稿が人びとのくらしの理解の一助となれば幸いである。その上で、最後に今後の研究課題を模索したい。

3 調査の概要

3.1 調査の概要

本稿にて分析するのは、2017 年 12 月に筆者が単独で行ったインタビュー調査である。本調査では、グループインタビューを行った。一回につき 4～5 名のグループに対し、筆者が用意した質問項目を、話の流れ次第で順番を調整しながら質問していく半構造化インタビューを行った。インタビュー協力者には全員に質問紙も記入してもらい、その内容の一部も本稿にて補助的に用いる。一回のインタビューにかかる時間は 60～90 分であった。インタビューは協力者の了解を得て録音し、トランスクリプトを作成した。本稿では中国語を適宜日本語に翻訳して紹介する。インタビュー協力者は、現地協力者に依頼して募って

もらった。インタビュー協力者の特徴については次項にて述べる。

3.2 インタビュー協力者の特徴

本調査の協力者たちは、全員大学院生（修士課程相当）である。外国語専攻の大学院生であり、学校のプログラムによって来年には全員が留学する予定である。中国では、都市部と農村部との制度的・文化的な違いがあり、農村部に人口の 8 割がいると言われている。大学進学率は 2016 年時点で 42.7%であったが、1990 年に高等教育機関への進学率が 3.4%であったことからみれば、この間劇的に上昇している。大学の本科から大学院に進学した割合は 2011 年時点で 9.6%である。大学進学率が上昇し、大学生数が増えたため、大学院進学率が横ばいであっても人数が年々増加していることは間違いなさそうである。ただし、中国の中では依然として少数派であり、また半数以上が理系であることから、文系の外国語専攻で、さらに特定の外国語であれば、その人びとは中国国内では決して一般的であるとは言えない人びとだろう。中国では、社会主義国家設立以来の理念、その変遷と、伝統的価値観とが拮抗し、歴史的にも人びとの価値観は揺らいできたとみられる。中国では、海外渡航が日本と比較して難しく、学生が気軽に海外旅行に行くことは難しいとされている。渡航に際しては所得証明を提出し、ビザの取得をするなどの厳しい条件があり、ノービザで渡航できる国も決して多くはない。そのような中で、他国に渡航することがすでに決まっており、外国語を専攻しているためその外国の文化についても学部生よりさらに研究などを進めている大学院生たちは、中国の社会主義的価値観や伝統的な保守的価値観以外にも、比較的多様な価値観を持ち合わせているのではないかと考える。そのような人びとでさえも、女性ということでも考慮し、悩むこと、目指すことなどがあるのであれば、現代中国社会の中でくらす人びとの姿がより明確に浮かび上がるのではないだろうか。本調査ではその点に着目し、よりしがらみがないとみられる女性たちに話を聞き、女性たちの共通の、あるいは多様な価値観を聞き取り、それについてそのグループ内でどのような反応が起こるのか、連鎖反応で起こる話題がどのようなものになってゆくのかについても注目して、個人的な見解や経験の語りだけにとどまらないもっと生き生きとした語りを分析する。

調査したグループは 3 グループであり、A、B、C と名前を振った。調査協力者一覧表の協力者に振った【アルファベット - 番号】は、アルファベットが該当グループであり、番号は便宜上、個々の番号として振っている。この番号には意味はなく、単なる振り分けた番号である。出身地は一人ずつ聞いているが、個人の特定を避けるため記載しない。一部を説明すると、北方出身者は半数以下で、半数以上が南方出身者であった。実家から大学院までの距離は、高速鉄道で 2～3 時間という人から、汽車で 20 時間以上という人までそれぞれであった。

表 1 調査協力者一覧

協力者	職業	年齢	恋人の有無
A-1	大学院生	22	無
A-2	大学院生	22	有
A-3	大学院生	26	無
A-4	大学院生	24	有
B-1	大学院生	23	無
B-2	大学院生	23	無
B-3	大学院生	23	無
B-4	大学院生	23	無
C-1	大学院生	22	無
C-2	大学院生	24	有
C-3	大学院生	21	無
C-4	大学院生	23	有
C-5	大学院生	23	無

4 インタビューの紹介と分析

本章ではインタビューデータを紹介し、適宜分析・考察を加えていく。インタビューに登場する記号「*」は調査者である筆者を表し、アルファベットと数字がハイフンでつながっているものは表 1 の調査協力者を表す。カッコ内は筆者による補足である。部分的に、意味が変わらない範囲でてにをはを筆者が修正している。

4.1 年齢規範——年下の男性は「嫌」、理由は「心理」

恋人や結婚相手⁽⁴⁾についての質問をした際に、相手の理想の年齢は年上なら 3～10 歳くらいまでならよいとの回答があったが、年下については否定的な回答がうかがえた。年上が不可との回答はなかったが、年下は不可との回答もあった。

*：何歳下までならいいですか？

A-1：下？下は嫌。

A-3：3 歳までならいいです。大丈夫。

*：下が嫌な理由は…

A-4：面倒くさい。ガキみたいじゃないですか？

一同：(笑)

*：やっぱりガキみたいな男の人は嫌ですね。

A-4：嫌ですね。

*：それは年齢が高くても…

A-4：あー、そういう人もいますけど…

A-1：私は実際の年齢より、心理の…

一同：はい。はいはい。

*：（中略）どんなところで子どもだなあと感じますか？嫌だなあと思う部分…

A-1：ゲームばかりやってる。

一同：あー。

A-1：家事も全然やらない、責任がない感じ。

A-3：甘い。

A-1：もう一つ、母のことばかり

一同：あーそうそうそう、嫌ー！嫌ー！一番嫌。

A-4：私の母は何々と言っています、という…（中略）もし結婚したらどうなるの？

A-3：自分がお母さんになります！（笑）

*：もしもそのような人と結婚したら、彼の母親みたいにされる…？

一同：はい。

*：嫌ですね。

一同：嫌です！！

* * *

B-3：でも、一般的…女性の心理年齢は男性より…

B-1：成熟している…

B-3：うん、ですから…

（中略）

B-4：心理的な年齢を、考えて。

*：心理的な男性の年齢が、高い方がいい…

B-2：うんうん、はい。

B-1：私より若い男の子は浮気する感じがします…（中略）年上がいいです。

* * *

C-5：その、心の年齢とか、女の子より低い、という感じかな、男。だから、彼氏です
から、息子ではないよ。

一同：（笑）

*：おーそうですねー

C-5：彼氏がほしいんですよ。息子ではない。（中略）お母さんになりたくない。

（中略）

C-2：家事もできる…男の子は…(笑)

*：家事もできる…

C-5：家事家事、そうです。

以上のように、全てのグループで年下の男性については否定的に語られた。否定される理由も文脈がほぼ同じであり、心理的に未成熟である点、責任感がない点、が忌避された。パートナーになる男性がケア対象者であるという点も忌避されており、「息子」「家事も全然やらない」という点が具体的に指摘された。家事については、責任感のない年下という存在とは反対の、良い点として挙げられた語りもあった。結婚後の家事について女性たちに展望を聞くと、夫との「分担」を必ず回答した。家事をする夫がいいかと筆者が質問すると、次のような言葉も返ってきた。

A-1：分担した方がいい。夫が愚痴を言うかもしれない…家事ばかりやってて。

このように、夫が全てをやればよいと考えている様子はなく、まだ見ぬパートナーへの気遣いも発言から垣間見ることができた。夫婦関係や家族関係について、堅実な思考をみることができた。

ここで面白いのは、中国で結婚できる法定年齢が、22 歳であるにもかかわらず、そのことに誰も言及しなかったことだった。調査協力者は表のとおり、21 歳の者もあり、23 歳が多い。自分より年下の男性であれば、まだ結婚の法定年齢に達していないことになってしまう。まだ法定年齢ではないから無責任であることを免罪するような発言もなかった。恋人にしても結婚相手にしても、そのふさわしいであろう年齢に自分を置いて発言しているだろうことも考えられるが、言及される内容が男性の人格に関わることであり、人としてどのような人であることが望ましい望ましくないかについて第一に考慮し、重要視しているとみることができるのではないだろうか。

それから、年下は心理的に未成熟であるという話から出てきた話題の一つに、「母のことばかり」の男性についての言及があった。このような男性は「妈宝（マーバオ）」と呼ばれ、「妈妈的宝贝（マーマーダバオベイ）」（「お母さんのベイビー」という意味）の省略である。自分の意見がなく、「お母さんがこう言っているから…」が口癖で、仕事や結婚相手についても母の意見を聞いて決める、あるいは母の意見に従うというイメージが人びとの間で共有されている。このような男性像は「自立がない」と「嫌」がられ、忌避されていた。

4.2 恋愛と年齢規範——結婚に際して優先されること

男性の年齢が女性より低いことに関しては、その男性の人格を考慮して忌避されていた。それでは、女性自身の年齢に関する話はあるのだろうか。

まず、恋愛感情に関する話から年齢に関する話に移行する語りを紹介する。

*：(略) 若い時は…

B-2：やはり、感情の方が一番大事かな。

*：感情が大事。恋愛感情。

B-1：うん恋愛の感じが大事。

B-4：若い時は…

B-2：若い時は、やはり…

B-1：中身よりは外見の方が…(笑)

B-2：そうですね、やはりあの自分の愛情の感じがいい。そして、歳をとってから、いろいろな方面から、

B-3：ストレス…

B-2：そうです、お金とか、必要なんです。中国で、25歳を迎えたら…

B-1：25歳前なら、わがまま言ってもいい。

B-2：選択がたくさんあるから、でも25歳を超えたら、まあちょっと厳しい状態になります…。(中略)まもなく。(中略)私はよく母にそう言われます。25歳以前は、男がとても条件がいい。

B-1：比べて…

B-2：そうですね、(25歳以前は)自分から、選択する可能性があります、でも25歳を超えたら、他人から

B-1：他人が自分を選ぶ。

B-2：そうです、立場も変わります。中国ではそう…

B-1：条件がどんどんどんどん下がるのが…

女性は25歳を過ぎたら条件を下げなければならないという語りである。「立場も変わります」とも語られ、語り全体からも年齢規範がうかがえた。結婚に関して年齢規範の方が恋愛感情より優先されるという語りは注目すべき部分だろう。以下に、恋愛と結婚についての認識が語られた部分を紹介する。

*：結婚しないような男は、別れる…

B-1：もっと遊びたい…そんな人…

B-2：そうです。お前結婚したくないなら、なんで私と付き合った?!そういう感じ。

私は本当に結婚する気がありますから、でも、

B-1：その恋愛するのは…結婚は目的ではないですけど、でも絶対結婚しない人は、ヤバイ…中国の女にとって、恋愛は結婚のために…結婚が目的で恋愛する人が多い。

* * *

C-2：はい、現実には、よくあります。結婚…恋愛するのなら、はい、いいです、でも結婚するときは、いろいろ考えなければならない。

*：恋愛はいいけど、結婚なら考えることは、どのようなことですか？

C-2：あー、例えば…

C-3：私は、たぶん結婚相手は、恋愛の相手とはたぶん違うと思います。

C-2：自分と一緒に…

C-3：本当の大好きな相手はたぶん結婚の相手じゃなくて…

C-2：家族の意見なんか…はい、相手の仕事や、なんか友だちからのいろいろな意見

*：いろいろな意見

C-2：はい、「この子はダメ」

*：(笑)

C-2：(笑)そんなこと言ったことがあった、私からは、ありました。

上記の語りからは、恋愛より結婚が優先されている状況がわかる。府中（2016a）では、日本人未婚女性のインタビューから、恋愛感情が第一に優先されるという語りや、結婚の可能性がなくなったことで恋愛感情がなくなったとの語りがあり、恋愛感情を伴わない結婚は忌避されていることが確認できた。しかし、本調査では、恋愛は結婚に関する年齢規範がない時期に得られるオプションのような存在という可能性がうかがえる。恋愛が前提の結婚という意識がわかる語りはほとんどみられなかったが、恋愛関係になった場合に結婚が前提になっているという語りはあった。結婚相手の条件を訊ねた際に、一人の協力者が「愛すればいい」と答えたが、他には恋愛感情を優先している回答はなかった。

先ほどから条件という言葉を用いているが、恋人や結婚相手に求める条件を訊ねると、「学歴」「出身地」「仕事」「家庭状況」「経済的な面」「価値観」「性格」「趣味の一致」「生活に関する態度」といろいろと持ち上がった。この中で説明が必要なのは「出身地」と「仕事」、「家庭状況」、「経済的な面」であろう。「出身地」は、慣習と直結している。先に述べた南北かだけにとどまらず、地域ごとに細かな慣習が異なる。本調査で得た具体例は、出産後に子どもの世話を父方の祖父母が看るか、母方の祖父母が看るかが地域によって異なるという話であった。これらの慣習が異なる出身地の男女が結婚すると、「喧嘩になる」という。ほかにも、春節（日本の旧正月）で、どちらの実家に帰るか、あるいは帰ってはい

けないか、という慣習もあり、このことで夫婦が喧嘩することはよくあることだという認識がうかがえた。夫婦が喧嘩することは望ましくはないが仕方がないことだと認識され、夫婦の親同士が喧嘩することになる事態は望ましくない結婚だとして忌避する様子が見えがえた。「仕事」は、勤務先の地域のことである。職業の種類ことではなく、勤務地の心配が先に立っている。これは女性も必ず雇用労働者として働くことだけではなく、男性の仕事も優先し、女性が男性に合わせて仕事を辞めてついていくという発想が少ないことを暗示している可能性がある。「家庭状況」は、結婚相手の親がひとり親かどうかということについてである。特に親が離婚を経験している家庭かどうかを気にしていた。「経済的な面」とは、自分と結婚相手の家庭の経済状況がどうなっているかどうかである。

＊：先ほどの条件の中で、学歴、出身地、（誰か：仕事…）、そして家庭状況というの
がありましたが、家庭状況というのは、どのような…

B-2：親が、別れたかどうか。

B-1：はい、両親がいるかどうか、そして一人だけなら…。

B-2：よく、男の親が、別れたり離婚したり、子ども…

B-1：の場合が、ちょっと…

B-3：きょうだいが何人か…

B-4：親戚が…

B-2：多すぎるのはちょっと…

B-4：春節はどこに行くのか、彼の実家、私の実家よく夫婦喧嘩になります。

一同：うんうん

＊：皆さんはどうしたいですか？自分の実家？

B-2：今年は自分の実家、来年は君の実家、そういう…

＊：あー、順番に、

B-2：そうです、順番に。

B-3：はい、中国は。

（中略）

＊：条件は、どの条件が一番大切ですか？

B-2：価値観。

B-3：性格。

B-4：私は趣味。

B-1：経済的な面。

（中略）

B-1：私は、生活に関する態度。私が気にしなくていいことは、彼も気にしなくていい。
態度かなあ。

*：習慣が違ふとちょっと大変かな…

B-1 んー、はい、何を考えているか全然わからない人は、怖いです。

B-3：私の両親は、部屋。

B-1：アパート。

B-3：重要です。

*：親が重要だと思うのは、どんな条件ですか？

B-2：一番重要なのは部屋。

一同：うん部屋、部屋。

B-1：あと経済的な…

B-2：これがあれば、将来子どもの教育や、医療などいろいろできます。一番大切です。

B-4：私は愛すればいいです。

*：愛すればいい。

B-4：経済力と、私の家族と、ふさわしいか。そんなに差がない…

B-1：んーそれも重要です。

*：じゃあ、経済力が、高すぎるのも低すぎるのも…。

B-1：(ここで諺を提示)、これは経済だけではなく、価値観も、家庭観などいろいろなものがあります。生活習慣、とても重要です。

途中で B-3 が「私の両親は、部屋」と、自分の話ではなく親の意見を話し始めた。このように、自身の意向の話の最中に親の意見を話し始めるという状況は、2017年6月の南京市での調査においてもみられた。親の意向が重要であり、この話題に欠かせないからこそ言及されている。

本調査で言及された望ましい結婚相手は同質性が高い相手であるといえるだろう。階層や年齢が近い同類婚よりももっと詳細に、生活習慣を含めた同質性の高い結婚を具体的に求める語りがみられた。これは南京市、北京市の調査でも必ず言及されたことであった⁽⁵⁾。同質性の高さを求めるのは、そもそも中国が大きな国であり、地域ごとに慣習が異なるからこそ具体的に言及される内容であるだろう。違う地域は異なる文化圏となり、異国とは言わないまでも、中国社会が多様であること、一括りに語ることができないこと、文化圏の異なる人びとの中で結婚を含めた将来を考えるという状況に置かれた中国の人びとの姿を垣間見ることができる。

以下は、年齢が高くなることでどのような条件をどのように変更していくのかについて、具体的に模索する語りを紹介する。

B-4：いつも私は友だちに私は結婚しないって言っていました。でも実は、もしいい人がいたら結婚します。でもそれまではたぶん長い時間がかかります。

B-2：うんうん。私もそう言った。もし適当な相手がいれば、結婚する。もし相手が見つからないなら、30歳を超えても、結婚しない。

B-4：そう、私もそう思ってる。

B-1：お見合いしないの？

B-4：うん、しない。

B-2：たぶんします。それも相手を探す方法…そう、相手を探すために。いろいろ試す。

*：もしもいい相手がいたら、結婚する。年齢は、あまり関係ない？

一同：(笑)

B-2：年齢は、今は3歳上の方がいいと思います。もし私は…(中略)年を取ったら…30歳ぐらいなら、相手はもっと年上でもいい。選択が少ない。その時は。

B-3：一度の経験は…

B-2：バツイチ。

B-3：その結婚の理由を調べます。

ここでの語りの特徴は、25歳の次に30歳という年齢規範が登場した部分である。30歳を超えても結婚しないことは、かなり強く相手の選考を優先しているということを強調するために出された、最高齢の限界であると言える。厳密に言えば、法律的には限界など存在しないのであるが、年齢規範があることでこのように念頭に置かれている限界というものが顕在化する。30歳を過ぎた女性を「おから(大豆の搾りかす)」と揶揄する言葉など、未婚女性に対するバッシングの言葉はあふれている(ちなみに、対峙される30歳を過ぎた男性は「枝の花」である)。25歳の年齢規範について筆者が訊ねると、男性は25歳は「関係ない」、条件が悪くなったりしないとの回答を得ている。30歳以降に未婚である場合に、見合いをするかどうかについては、2人の回答が分かれた。見合いをしないと回答したのは、結婚の条件に「愛すればいいです」と答えたB-4であり、B-2はお見合いも「相手を探す方法」と前向きにとらえていた。年上なら3歳年上が一番理想と語っていたB-2は、30歳を過ぎたらもっと年上でもいい、相手に離婚歴があっても構わない、という条件の下げ方を模索していた。慣習に関わる内容で条件を下げるという回答が3グループいずれでも全くなかったことから、慣習に関わる部分は条件変更は難しく、年齢に関わる条件は変更可能である様子がうかがえた。

4.3 見合いにたいする肯定的態度・否定的態度

見合いに関して、現在は学生であり、否定的な態度がうかがえた。

B-4：私の両親は、私がまだ若いって

一同：おー

B-4：断りました。

＊：あー。じゃあ両親のところに、お見合いが来た…？それを断った。

一同：わあー

B-2：いいねー。

見合いの話を、娘に取り次がずに親が断ってくれたという話が、他の協力者たちに大変好評であった部分である。

他にも、親の紹介で連絡先を交換し、数カ月ほど付き合った経験がある B-1 の語りを紹介する。ここでは親に押し付けられず、親が自分を考慮してくれたことを肯定的に受け止めている様子がみられた。

B-1：私の母は、私の意見を聞いて、その人（かつての恋人）を紹介しました。

＊：じゃあ、嫌なら…

B-1：はい嫌なら断ります。

その後、お見合いにたいする肯定的な視点が語られていった。

B-2：でももしも、もしも家族からのお見合いなら、相手の条件がいい、普通よりいいですね。

B-3：結婚する可能性が高い。

B-2：そうです、そうです。

B-3：もし恋愛したら、まあ経済力も持ってますし、

B-2：そうです、そうです。

B-3：学歴、そして家庭状況もいい。仕事する街も、家族からの…

B-1：いろいろ考えた後、紹介します…

＊：すごく、条件がいい…

B-3：うん、はい、

一同：親として…/背が高い…/つりあいそうな感じ…

B-3：だから成功率が高いです。うちの隣の夫婦は、お見合いを通して、結婚しました。

＊：おー。お見合いの夫婦は、仲がいい感じがしますか？

B-3：うん、はい、仲がいい感じがします。

「相手の条件が」「普通よりいい」、「結婚する可能性が高い」、「成功率が高い」と、おおむね好評のようにみられる。親にたいする信頼の高さとも言える。しかし、引き続き以下のような否定的な意見も語られた。

B-2：まあ私によれば、あの、お見合いを通して、結婚するなら、普通は歳がちょっと
…たぶん、

B-1：うん、そんなに若くない。

B-2：そうだね、そんなに若くない。もしお見合いなら、相手がいいかなーと思って、
まあそういうだんだん、付き合っ、まあ最後結婚する…という流れ…

＊：二人とも年齢が高いから…

B-2：そう、あんまり細かいこと…そうですね…感じがいいから、まあ一緒になろうか
…。

この部分の語りは、かなり言葉を濁しながら、お見合いに対するネガティブなイメージを語っている個所である。「そんなに若くない」「あんまり細かいこと…」で途切れており、続いて「感じがいいから、まあ一緒になろうか…」という流れを説明している個所である。取り決め婚としての拘束力はみたところでは弱く、「だんだん、付き合っ、まあ最後結婚する」と当事者の自由意志を確認する段階が語られた。女性たちには、お見合いにたいする肯定的・否定的側面それぞれへの思いがあり、親への信頼から肯定的に語られる側面があるものの、夫婦関係を作るまだ見ぬ相手に関しては不安や警戒心がみられるといえるのではないだろうか。

5 最後に——今後の課題

5.1 中国若年未婚女性たちにとって結婚とはどのようなものか

本調査からみてきたのは、女性たちの質実剛健な姿である。東京での未婚女性にたいする調査では、「好きかどうか」が結婚に最も重要であると回答された（府中 2016a）。東京調査では、協力者の選定過程において、経済的な側面でも自立でき、恋愛経験もある 30 歳前後の未婚女性たちにインタビュー調査を行った。本稿で紹介した杭州市での調査では、調査対象者たちの年齢が異なるため、一様に比較することは難しい。しかし、社会的な文脈はある程度とらえることができるのではないかと考える。東京調査女性たちが、学生時代に恋愛を優先順位一位から外すとは考えにくい。同時に、杭州市でのインタビュー協力者たちが、30 歳になって「好きかどうか」が最も重要と発言する可能性も低いだろう。杭州の協力者たちはさまざまな条件について詳しく語ったが、その条件はそれぞれ「家族としての機能」を重視した発言であった。「家族としての機能」とは、家事や子どもの養育や教育、季節ごとの行事をスムーズに進めることだと考えられる。そこでももちろん、女性たちが身体的・精神的に無理な我慢を強いられないよう、親がお見合い相手を紹介する際にも気を遣っており、親が子どもに気を遣っていることを子ども側も信頼している。家事は分担すること、性格上の好みなど、親は詳細なヒアリングのもとに子どもによさそうな相

手がいれば紹介したり、お見合いを勧めたりすると子どもは思っている様子がうかがえた。女性たちに、恋人として嫌だと思う相手の条件があるかと質問した際の語りは以下のとおりである。

＊：このような人は嫌だな、という条件はありますか？ボーイフレンドで。

B-4：自分が偉そう。何でも教えてくる…説教してくる…一番嫌いな(笑)

B-3：私好き。

＊：えー好き…

B-2：やはりよく腹を立てる男はダメ。(中略) もしも結婚したらたぶん DV になるから、だからダメ。

一同：あー。

好みが分かれるものの、身体的・精神的に負担がかかる相手は望まないようであった。それは逆もそうであり、自身が相手に負担をかけないよう、家事は相手任せにせず分担するなどについて、気遣いを語る場面もあった。

5.2 就労継続やそれへの諦めが語られないということ——結婚あるいは出産を機に仕事を辞めなければならないという規範がない社会に生きること

本調査では、家庭内のケア労働の担い手、特に家事の担い方が言及された。東京調査では、結婚後は自分がすべてやるとの回答、あるいは自分の方が多くやるという回答がみられた(府中 2016a)。その理由は、結婚や出産を経て職場で働き続けることが難しいという背景があり、仕事を辞めることが想定されるうえでの語りであった。仕事を続ける理由は家計のためや家族のためであり、家計補助、あるいはよき妻よき母であるためにも、外部との接触を絶やさずにいたいので働くという姿勢での語りとなっていた(府中 2016b)。しかし杭州市での本調査では、女性たちは仕事を辞めることを念頭に置いた語り自体をしておらず、家事は自分も夫も負担にならないように分担することを希望あるいは想定していた。ただし、子どもを持ちたいかどうかに関する話題でインタビューを勧めた際は、「子どもを産んだら 2 年無駄にするので」と、キャリアを考慮して出産時期を決めたいという発言もみられた。この発言は、中国の言葉「一孕傻三年」に由来する考え方とみられる。これは「一度孕むと女/母親は三年バカになる」、という意味の言葉で、女性蔑視の言葉でもあるが、妊娠期と子どもが歩いたり喋ったりするまで、母親は子どものことにばかり気が散ってしまい、まともな仕事ができなと言われ、信じられている。もちろん現代では、それは科学的根拠があるのかどうか疑わしいと言われているが、それでも伝統的な言葉の威力は簡単には衰えない。

本稿の問いは、最も革新的な環境にいるだろう女性たちが、どのような恋愛観・結婚観

を持つのかというものであった。実践的な思考ではあるものの、慣習の一致を重んじて同質的な結婚を望むこと、結婚あつての恋愛であること、恋愛は若いうちのオプションであるといった認識は、伝統的な価値観や文化を受け継いでいると言えるだろう。しかし、家事については、協力者の親世代においても中国男性で家事を担う人が少なくないものの、協力者たちは家事の分担を志向し、自分の仕事を持って続けていくことを想定していた。自立という言葉も散見され、結婚に自立の意味を見出している様子もうかがえた。家事と、「妈宝」を忌避する語りの文脈からみられたのは、「受け身の男性」が忌避される様であった。成人男性はケアの担い手であり、ケアの受け手になるような姿は好ましくない。意見も持たずに、人生の重要な選択である結婚や就職の際に、ケアラーであった親の意見を、言いなりのように聞いてしまうのは、未だに親のケアないし加護を受けているということである。これが強く忌避され、「嫌」がられていた。年下が「嫌」であるのも、同様の文脈であった。家庭という再生産の場で、男性がケアの担い手の一人であり、分担できる同志であることが重要視されているのではないだろうか。

5.3 親への厚い信頼と拒否権を持つ子ども

お見合いに関する語りの中で「家族からのお見合いなら、相手の条件がいい、普通よりいいですね。」という言葉を紹介した。家族とはほぼ親の意味であり、親が仲介した見合いであれば、自分の希望をよくわかった上での見合いとなるため、あとは個人的に相性さえよければほぼ結婚に結び付くと考えられている。特に、家族間（親同士）のいさかいや、慣習の違いが結婚に際しての大きな問題と考えられている中国において、その障壁がないことは結婚のしやすさが格段に違ってくるだろう。また、親を通した見合いは、時に若い女性たちにとって重いプレッシャーとなっているが、「嫌なら断ります。」という語りを紹介した通り、拒否権が子どもの側にあることが特徴的であるといえる。過去の研究では、見合結婚と自由結婚の比較がなされる際に、親子関係と拒否権についてストーンが4つのバリエーションを提唱した（Stone 1977 : 270）。このバリエーションの中でも、2番目にあたる「結婚相手を選ぶのは親や親族だが、本人にも拒否権は一応ある。1, 2回の本人同士の面会の後、本人に異論がなければ結婚する。」というものが比較的近いが、しかしこれとはかなり違うシチュエーションであると考えられる。個人主義化が進んだ欧米や日本を中心に考えれば、親が結婚相手を探して見合いを設定することは、すでに大きな干渉として受け止められるであろう。しかし、子どもの側に拒否権があり、若ければ若いほど拒否権を行使しやすい可能性があることも、今回の調査で示唆された。

また、家族による見合いの設定は、自由恋愛に強い願望がある社会の人びとにとっては忌避される状況であろう。今回のインタビュー中にも、「自然な出会い」を求める語り、「愛があれば」という語りはあった。しかし、婚姻率の高い中国社会では、出会いから結婚に至るまで、恋愛第一の傾向がある欧米や日本と異なる価値観やシステムが存在しているの

ではないだろうか。翻って、日本社会で結婚と認識されているものが、他の社会で結婚と認識されているものと似ているけれども異なるものである可能性を常に念頭に置いていなければならないのではないだろうか。「(運命的な) 強烈な恋愛感情がなければ結婚してはならない気がする」という語りが得られた東京でのインタビュー調査の語りは特徴的であるが、強い恋愛感情が結婚に至る第一条件という場合の結婚と、そうではない結婚は、その質がかなり異なると言えないだろうか。結婚後の生活、家族の役割や機能についていえば、再生産の場であり、核家族でくらす都会の人びとのくらし向きなどの共通点も多くあるが、出会いから結婚に至るまでのプロセスや、結婚すること自体に関する価値観に注目すれば、異なる部分もかなりみえてきた。そしてそのプロセスや価値観について、伝統的な部分と現代的といえる部分が交差している。2010 年代以降の中国や日本をさらにみていくことで、それらの曖昧な認識の部分を解きほぐし、現在問題とされている結婚や家族に関わる事柄についてアプローチし、答えを出していけるのではないだろうか。

5.4 今後の課題

本稿の目的は、データを提示しながら知見を深め、今後の課題設定の足掛かりとすることであった。分析からは複数の有意義な論点が浮き上がってきたといえるだろう。それらの論点は、2017 年の南京市、北京市での調査結果と一致する部分もあり、それらと合わせて分析することによって、新たな課題設定とその究明が可能となるだろう。調査協力者たちの年代やライフステージはそれぞれ異なるが、それでもなお都市部の女性たちに共有されている価値観や想定していること、行動基準などに注目し、分析・考察を進める。その研究については、また稿を改めたい。

また、本調査は 2017 年に行った調査であり、日進月歩の中国では、1 年後でも古いデータとなる可能性がある。2017 年時点のデータとして貴重である反面、いつまで「現在の中国」のデータとして扱えるかはわからない。一年で大学進学率が 10 ポイント以上伸びることもある。人口の多い中国における 10 ポイント上昇は、母数が大きいため大変な人数にのぼる。構成員の属性、そして社会構造が日々変化しているため、今後の中国の動きや人びとの変化を引き続き追っていきたい。

謝辞

本稿で行った調査では、お茶の水女子大学大学院の田姫さんに多大なるご協力をいただきました。この場を借りて御礼申し上げます。

注

- (1) ここでの専業主婦とは、家計に比較的余裕がある「セレブ主婦」に近い存在であるといえる。
- (2) 一人っ子政策は違反した場合の多額の罰金などで有名であるが、2011 年、2014 年に特定の条件下では二人まで子どもを持つことが許されるなどの規制緩和が行われていたことも念のため付記する。
- (3) 南京市でのインタビュー調査は、大学 4 年生を対象にしたものであった。本稿のインタビューと対象者の年齢・ライフステージは近いが完全に一致しないため、比較検討には十分な注意が必要である。
- (4) 今回の調査協力者たちは全員、現在恋人がいる人もいない人も、将来結婚するつもりがあるとアンケート調査で回答していた。
- (5) すでに南京市での調査協力者たちについて注 4 で述べたが、北京市の調査協力者たちは既婚で就職している 30 歳前後の女性たちであった。ライフステージの異なる女性たちが、結婚に際して優先すべき共通の価値観を語ったことは、興味深い。ただし、前述の南京市調査と同様に、北京市の調査についても、比較検討する際には十分な注意が必要である。

参考文献

- 青柳涼子, 2013, 「家族意識と家族生活」石原邦雄・青柳涼子・田淵六郎
編『現代中国家族の多面性』弘文堂, 216-233.
- 府中明子 a, 2016, 「恋愛結婚の条件——首都圏にくらす未婚女性へのインタビューから——」『家族研究年報』41 (0) :41-57.
- b, 2016, 「25～34 歳未婚女性における結婚観からみられる家族観と将来展望——就労をめぐる語りの分析から——」『千葉大学大学院人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書 流動化する社会と紐帯』301,96-108.
- Tan, Shen, 1994, “当代中国妇女状况的分析与预测”, “社会学研究”, 1994.3:69-77.
(=1998, 前山加奈子, trans., “経済改革と女性問題,” 秋山洋子・江上幸子・田畑佐和子・前山加奈子 ed., 中国の女性学, 東京都: 勁草書房, 49-71.)
- 馬欣欣, 2011, 『中国女性の就業行動』慶應義塾大学出版会.
- 瀬地山角, 1996, 『東アジアの家父長制』勁草書房.
- , 2017, 「少子高齢化の進む東アジア——『東アジアの家父長制』からの 20 年」
瀬地山角編『ジェンダーと東アジアで見る東アジア』勁草書房, 5-40.
- Stone, Lawrence, 1977, *The Family, Sex and Marriage in England 1500-1800*, London:
Weidenfeld and Nicolson.